opusdei.org

黙想の祈り:主の昇 天

黙想のテーマ:「イエスは弟子と私たちに使命を与えられる」「イエスは天に召されるが、私たちを見捨てることはない」「イエスは私たちの先頭に立って行かれる」。

イエスは弟子と私たちに使命を与え られる

イエスは天に召されるが、私たちを 見捨てることはない

イエスは私たちの先頭に立って行か れる 復活祭から40日後、教会はイエスの 昇天を祝います。ミサの叙唱にある ように「栄光の王、罪と死の勝利者 である主イエスは、天使たちが驚き をもって見つめる中(今日)天の高 みへと昇られました。主イエスは神 と人との仲介者、世の審判者、万軍 の王です」「エフ。イエスが天に上げら れる前に弟子たちに使徒的使命をお 与えになったことを聖マルコは記し ています。「全世界に行って、すべ ての告られたものに福音を宣べ伝え なさい (マルコ16・15)。それ は、単にイスラエルの人々やローマ 帝国にだけではなく、全世界、全被 造物に福音宣教するという野心的な 使命です。「ふつうの、高い知的能 力を備えているわけでもない人たち の小さな集まりに、イエスがこの官 教の使命を託したことは、あまりに も無謀に思えます。しかしこの世界 の権力者に比べれば取るに足らない

かに思えるこの小さな集団こそ、イエスの愛といつくしみのメッセージを世界の隅々にまで伝えるために遣わされた人たちなのです。しかし神のこの計画は、神ご自身が使徒たちにお与えになる力を伴って初めて可能になります | 図。

イエスの復活後40日間の様々な経験 の後、弟子たちは熱烈な信仰と熱意 をもって盲教の使命に応えました。 「弟子たちは出かけて行って、至る ところで宣教した。主は彼らと共に 働き、彼らの語る言葉が真実である ことを、それに伴うしるしによって はっきりとお示しになった」(マル コ16・20)。使徒的使命は最初の弟 子だけではなく、私たちにも与えら れている神の仕事です。だからこそ 私たちは、主が天に昇られたその日 を身近に感じるのです。「使徒職と はキリスト者の呼吸と言えるでしょ う。神の子であれば、この霊的鼓舞 なしに生きることはできません。今

日の祝日は人々の救いに対する熱意 が主の愛すべき御命令であることを 思い起させます。栄光を受けるため にお昇りになるとき、私たちを地上 の果てまで主の証人としておつかわ しになったのです。責任は重大で す。キリストの証人となるというこ とは、まず第一に主の御教えにふさ わしい行動をし、私たちの行ないが イエスを想い起こさせ、いとも甘美 なるみ姿を人々に思い出させるよう に戦うことであるからです。憎しみ を抱かず、抱擁力をもち、狂信的に ならず、本能を克服し、犠牲を甘受 し、人々に平安を与え、愛し合う私 たちを見る人々が、これこそキリス ト信者である、と言えるように振舞 わねばなりません | 131。

聖ルカによればイエスは天に昇られる直前、「彼らをベタニアまで連れ

て行き、両手を上げて祝福されまし た」(ルカ24・50)。ある意味で は、その日から「キリストの両手は この世界に伸ばされ続けています。 キリストの祝福の手は、私たちを守 る屋根のようなものです (…)。キ リストは天に昇られる時、私たちの ところに来られ、神に向かって開か れた世界に私たちを引き上げられた のです。だからこそ弟子たちはベタ ニアから喜んで帰ることができたの です。私たちは信仰によって、イエ スが私たちの上に祝福の手を差し伸 べておられることを知っています。 それがキリスト者の永遠に続く喜び の源なのです | 国。時課の典礼は、 この神秘について聖アウグスティヌ スの言葉を考察しています。「イエ スは、私たちのところに下って来ら れた時、天から離れたのではありま せん。また再び昇られた時、この世 から退かれたのでもありません (…)。イエスは私たちを憐れんで 天から下って来られました。そして

また一人で昇られましたが、私たちも共に恵みのうちに昇るのです」

聖マルコは福音書の最後に「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた」(マルコ16・19)と記しています。 聖ホセマリアの言葉は、その場面と想像するのに役立ちます。「キストの聖なる人性が、全階級のでも、学光にあげられたすべての聖、栄光にあげられたすべての聖、崇拝をお受けになるのは、まことです」「EL。

イエスは天に昇られますが、私たちを見捨てることはありません。「イエスは御父とともにおられるのです。去って行かれたのではなく私たちの近くにおられるのです。イエスは、ご昇天以前のように特定の場所におられるのではなく、空間を支配する力によって歴史全体にわたるあ

らゆる場所に現存し、すべての人に現存し、すべての人にできるのです」」できるのですよができるのです。またちと共に私たなの中では私のうちに私た聖体のイエ可はいるとはおらことはするとはないで気がらとはないであるというでもよってであるというできましてがそのであるというできまりあう道のことでもあります。

[8]0

「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げ

られたイエスは、天に行かれるのを あなたたちが見たのと同じ有様で行またおいでになる』」(使徒言行いなる」」(を持ってはいでになる」、一部でははキリの祭日はキスの祭日はキスの祭りである私たちが、対しているでは、かれたなっては、なっては、なっては、なっては、なっては、なってはないです。であり、ことを確信するなのです」「呵。

「イエスご自身が、この天の祖国への『出エジプト』を体験されました。そしてイエスはわたしたちので出エジプト」に全身ででいるはみます。イエスはわたしたちのではいて、神りに大いなになり、したのではいて、すべてにおいて人間とるまでものになり、十字架の死に至るまった。そして、神からくだりました。そして、神から

もっとも遠く離れた深淵にまで達し ました。このため、父はイエスをよ みせられ、このかたを『高く上げ』 (フィリピ2・9) ました。そして、 今やわたしたちの人間性とともに、 このかたを再びご自分の栄光で満た しました。神が人間のうちにいま し、人間が神のうちにいること。こ のことが今や、理論的な意味でな く、現実的な意味で真実となりまし た。それゆえ、キリストを土台とす るキリスト教的な希望は幻想ではあ りません。ヘブライ人への手紙が述 べるように、『この希望は、魂に とって頼りになる、安定した錨(い かり)のようなもの』(ヘブライ6・ 19) です。この錨は天にまで達しま す。そこにはキリストがわたしたち に先立っておられるからです | [10]。

主は天で私たちを待っておられ、私 たちが目標を達成できるよう聖霊の 賜物と実りを私たちに送ってくださ います。「主が天に昇られた後、弟 子たちはイエスの母とともに高間に集まって祈り(使徒言行録1·14参照)、復活したキリストを証しする力を与えてくださる聖霊を呼び求めました(ルカ 24·49、使徒言行録 1·8参照)。至聖なるおとめに結ばれたすべてのキリスト教共同体は、聖霊降臨の祭日までの数日間、再び特別な体験にあずかるのです | 「III。

- [1] ローマ・ミサ典礼書、主の昇天 のミサ、叙唱。
- [2] フランシスコ、「アレルヤの祈り」でのことば、2018年5月13日。
- [3] 聖ホセマリア『知識の香』122 番。
- [4] ベネディクト十六世=ヨゼフ・ ラッツィンガー『ナザレのイエス』 (Benedict XVI-Joseph Ratzinger,

- Jesus of Nazareth, Catholic Truth Society, London, pp. 292-293) .
- <u>[5]</u> 聖アウグスティヌス、昇天の説 教。
- [6] 聖ホセマリア。『聖なるロザリオ』栄えの神秘、第二の黙想。
- [7] ベネディクト十六世=ヨゼフ・ ラッツィンガー『ナザレのイエス』 (Benedict XVI-Joseph Ratzinger, Jesus of Nazareth, Catholic Truth Society, London, p. 284)。
- [8] 聖ホセマリア『知識の香』118 番。
- [9] ローマ・ミサ典礼書、主の昇天 のミサ、叙唱。
- [10] ベネディクト十六世、「アレルヤの祈り」でのことば、2008年5月4日。

[11] ベネディクト十六世	世、「アレル
ヤの祈り」でのことば、	2005年5月8
日。	

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-shu-no-shouten/(2025/12/16)